メッセージアウトライン
サムエル記第一28:1～25
「サムエルのことば」

［1］「そのころ、ペリシテ人はイスラエルと戦おうとして、軍隊を招集した。アキシュはダビデに言った。『承知してもらいたい。あなたと、あなたの部下は、私と一緒に出陣することになっている。』」

今までペリシテ人とイスラエルの戦いは何度も繰り返されてきたが、今度の戦いはペリシテ人の各都市の領主と兵を集結しての全面戦争であった。当然それは大軍勢となる。ガテの王アキシュはイスラエルの王サウルの追跡から逃れて、彼のもとに身を寄せていたダビデとその部下も戦いのために一緒に出陣することを告げた。

[2]「ダビデはアキシュに言った。『では、しもべがどうするか、お分かりになるでしょう。』アキシュはダビデに言った。『では、あなたをいつまでも、私の護衛に任命しておこう。』」

アキシュはダビデとその部下たちに、南部のツィクラグの町を与え、彼らはそこからシナイ半島の遊牧民アマレク人たちを襲い、戦利品の一部をアキシュに贈り、自分たちはイスラエルのユダ部族に属する南部の町々を襲って来たとアキシュに、うその報告していたのであった。そのことでアキシュはすっかりダビデを信用するようになっていた。そのような時にペリシテ人たちは連合軍を組織して、イスラエルと全面戦争をしようとしたのである。イスラエルが負ければ国家消滅の危機となる。

ダビデはアキシュのことばに答えて、「では、しもべがどうするか、お分かりになるでしょう」とあいまいな返事をする。アキシュはこれを彼に対する忠誠を示したことばと解釈して、ダビデを「いつまでも私の護衛に任命しておこう」と約束する。

[3-4]「サムエルはすでに死に、全イスラエルは彼のために悼み悲しみ、彼を彼の町ラマに葬っていた。一方、サウルは国内から霊媒や口寄せを追い出していた。ペリシテ人は集まって、シュネムに来て陣を敷いた。サウルは全イスラエルを招集して、ギルボアに陣を敷いた」

今までイスラエルの霊的指導者であったサムエルはすでに死んでいた。→25:1

「霊媒」…霊どもを扱う者の意。「口寄せ」…死霊から未来のことを知らせてもらう術を使う者。

このような者たちはイスラエルの律法では死罪であった。→レビ19:31, 20:27

サウルもこの点では律法に熱心であったが、わざわざ、この3節が書かれているのは後の話を理解する前提となっているからである。

「シュネム」…ガリラヤ湖の南西、イッサカル部族の領内、イズレエルの北約6キロメートルの地。

「ギルボア」…シュネムの南東数キロメートルのところにある山。

[5-6]「サウルはペリシテ人の陣営を見て恐れ、その心は激しく震えた。サウルは主に伺ったが、主は、夢によっても、ウリムによっても、預言者によってもお答えにならなかった」

サウルはペリシテ連合の大群を見て恐れた。その数はイスラエル軍よりはるかに多かったのであろう。また敵軍の数だけではなく、彼自身がすでに主なる神から見捨てられているという自覚と、さらに彼がいのちを取ろうと追い回していたダビデが、そのペリシテ軍に加わっているということも知って、その心は激しく震えたのである。

それでサウルは夢、ウリム、預言者によって主のみこころを知ろうとしたが、それらによっては主の答えはなかった。今まで長い年月、主のみこころに従わず、不信仰な生き方をしてきた彼が、苦しい時の神頼みとばかり願っても、主は答えてくださらなかったのである。

[7]「サウルは家来たちに言った。『霊媒をする女を探して来い。私が彼女のところに行って、彼女に尋ねてみよう。』家来たちはサウルに言った。『エン・ドルに霊媒をする女がいます。』」

サウルは、かつては預言者であり祭司であるサムエルにより頼むことができたが、彼の死後はそれもかなわず、最後には自分が律法に従って滅ぼした霊媒をする女を探して来いと家来たちに命じた。それに対して家来たちは、エン・ドルにその女がいますと答えるのであった

「エン・ドル」…シュネムから北東に約10キロメートルの地。

なぜ、家来たちはそのことを知っていたのであろうか。なぜ、サウルが霊媒や口寄せを滅ぼしていたときに、彼女のことをしらせなかったのであろうか。不思議である。

罪に満ちたこの世界は、王や指導者の命令一下、完全、完璧にそれが守られるということはないのであろう。規則や定めがあれば、その抜け道が作られる。禁酒法が制定されても、自家醸造の酒が出回る。麻薬撲滅が叫ばれても、それを使用する者や密輸入、密売が絶えない。エン・ドルの霊媒女もそのような矛盾の中でひそかに生計を立てていたのであろう。そしてサウルの家来たちはそのことを知っていたが、今に至るまでそのことをサウルに告げなかったのである。

[8-10]「サウルは変装して身なりを変え、二人の部下を連れて行った。彼らは夜、女のところにやって来た。サウルは言った。『私のために霊媒によって占い、私のために、私が言う人を呼び出してもらいたい。』女は彼に言った。『あなたは、サウルがこの国から霊媒や口寄せを断ち切ったことをご存じのはずです。それなのに、なぜ、私のいのちに罠をかけて、私を殺そうとするのですか。』

サウルは主にかけて彼女に誓って言った。『主は生きておられる。このことにより、あなたが咎を負うことは決してない。』」

サウルは変装して夜、二人の部下とともにエン・ドルの霊媒女のところに行った。彼女はサウルが霊媒や口寄せを断ち切ったことを教え、なぜ自分を罠にかけて殺

そうとするのかと疑うが、サウルは主に誓って、彼女がこのことにより咎を負うことはないと断言する。「主は生きておられる」とはイスラエルで誓いをするときの慣用句であるが、サウルはどのような思いでこのことばを言ったのであろうか。
[11-12]「女は言った。『だれを呼び出しましょうか。』サウルは言った。『私のために、サムエルを呼び出してもらいたい。』女はサムエルを見て大声で叫んだ。女はサウルに言った。『あなたはなぜ、私をだましたのですか。あなたはサウルですね。』」
　この霊媒女に実際死んだサムエルを呼び出せるような能力があったとは思えない。なぜなら、彼女はサムエルを呼び出してもらいたいと言われたとき、適当な身振り手振り、声音を使ってあたかもサムエルが呼び出されたように演じようとしたのであろう。しかし、彼女がそれを演じる前に本当に死んだサムエルが現れて来たので、彼女はびっくりして叫び声を上げたのであった。ではなぜこの時サムエルが呼び出されて来たのか。それは主なる神がこの霊媒女を用いて、サウルにみこころを伝えようとされたからであろう。彼女はこの時、自分を訪ねて来たのはサウルであることに気がつき、恐れつつ、なぜ自分をだましたのかと詰問する。
[13-14]「王は彼女に言った。『恐れることはない。何を見たのか。』女はサウルに言った。『神々しい方が地から上って来るのを見ました。』サウルは彼女に尋ねた。『どのような姿をしておられるか。』彼女は言った。『年老いた方が上って来られます。外套を着ておられます。』サウルはその人がサムエルであることが分かって、地にひれ伏し、拝した」
「神々しい」「年老いた方」「外套」…預言者や身分の高い人が着る衣服。→15:27, Ⅰ列2:13
サウルはこれらの特徴からこの呼び出されて来た人物がサムエルであると確信し、地にひれ伏して拝したのであった。
[15]「サムエルはサウルに言った。『なぜ、私を呼び出して、私を煩わすのか。』サウルは言った。『私は困りきっています。ペリシテ人が私を攻めて来るのに、神は私から去っておられます。預言者によっても、夢によっても、もう私に答えてくださらないのです。それで、私がどうすればよいか教えていただくために、あなたをお呼びしました。』」
　サウルはここでサムエルを呼び出した理由を告げる。
[16-19]「サムエルは言った。『なぜ、私に尋ねるのか。主はあなたから去り、あなたの敵になられたのに。主は、私を通して告げられたとおりのことをなさったのだ。主は、あなたの手から王位をはぎ取って、あなたの友ダビデに与えられた。あなたが主の御声に聞き従わず、主の燃える御怒りをもってアマレクを罰しなかったからだ。それゆえ、主は今日、このことをあなたにされたのだ。主は、あなたと一緒にイスラエルをペリシテ人の手に渡される。明日、あなたもあなたの息子たちも、私と一緒になるだろう。主はイスラエルの陣営をペリシテ人の手に渡されるのだ。』」

ここではサムエルのサウルに対する答えが述べられている。
①主はあなたから去り、あなたの敵になられた。
②主はあなたから王位をはぎ取り、あなたの友ダビデに与えられた。
③イスラエルはペリシテ人との戦いに負け、あなたもあなたの息子たちも死ぬ。
「このこと」とはペリシテ人の連合軍に敗れ、サウルによるイスラエル王国が倒されること。
④その理由は、あなたが主の御声に聞き従わず、アマレクを罰しなかったからだ。
[20]「すると、サウルはただちに地面に倒れて棒のようになり、サムエルのことばにおびえた。しかも、その日一昼夜、何も食べていなかったので、力は失せていた」
サムエルのことばを聞くとサウルは地面に倒れて棒のようになった。大変なショックであったのであろう。自分の将来、未来のことについてよいことを聞くのはうれしいものであるが、ここで伝えられたのはその逆であり、主は彼から去られ、彼の敵となられ、その王位はダビデに与えられたこと、サウルとその息子たちはペリシテ人との戦いで戦死し、イスラエルの陣営はペリシテ人の手に渡される。すなわち、戦いに敗れる。しかも彼は一昼夜、何も食べていなかったので、力も失せていた。彼はそのまま死んでしまってもおかしくはない状態であっただろう。いや彼は敵のペリシテ人の手にかかって死ぬよりも、その方がよかったのかもしれない。
[21-25]「女はサウルのところに来て、サウルが非常におじ惑っているのを見て彼に言った。『あなたのはしためは、あなたが言われたことに聞き従いました。私はいのちをかけて、あなたが言われたことばに従いました。今度はあなたが、このはしためが申し上げることをお聞きください。パンを少し差し上げます。それをお食べください。お帰りのとき、元気になられるでしょう。』サウルはこれを断って、『食べたくない』と言った。しかし、彼の家来も女もしきりに勧めたので、サウルはその言うことを聞き入れて地面から立ち上がり、床の上に座った。女の家に肥えた子牛がいたので、彼女は急いでそれを屠り、また、小麦粉を取って練り、種なしパンを焼いた。それをサウルと家来たちの前に差し出すと、彼らは食べた。そしてその夜、彼らは立ち去った」
「種なしパン」とはパン種を入れず、練った小麦粉を焼けたかまどに薄く塗りつけて作るもので、急ぎの食事に用いられた。サウルは食事をいったん断るが、女と家来にしきりに勧められたため、気を取り直して料理した子牛とともに食べた。そしてそのまま、夜のうちに帰って行った。
彼はすでに勝敗が決まっているペリシテ人との最後の戦いに臨まなければならないのである。
サウルの前に現れたサムエル。それは霊媒師の力によるのではなく、霊媒師をも用いて啓示を与えられる主権者である主なる神がなさることであった。モアブの王であったバラクは、かつて出エジプトをしてカナンの地に侵入しようとしていたイスラエルを呪うように占い師バラムに頼んだが、主は彼を用いて呪いではなく、祝福のこと

ばを語らせた。→民数記22~24章
　この28章で強調されていることは、サウルが神に見放されているという事実と、彼がペリシテ人との戦いを前にして非常に恐れ、絶望的な状況で、自ら禁じた霊媒にすがるという罪に走ったことであった。そして霊媒師の力によってではなく、主権者である神の働きによって、サウルの前に現れたサムエルは決定的な神のさばきを告げたのであった。そしてそれはまた、ダビデの時が近づいたことをも示しているのである。こうして少しずつ、神の摂理のうちに時代は進んで行く。
→Ⅰサムエル13:13~14、15:22~23
アダム以来の罪の中にあるすべての人間は、決定的な主のさばきの宣告を聞く前に悔い改めて
主に従う者とならなければならない。→マタイ3:1~3、4:12~17、エゼキエル18:23~32